

問題 C

問 1. 摂食・嚥下に関わる器官について、誤っているものを選びなさい。

1. 喉頭蓋---嚥下時、気管への入り口を遮断する
2. 口---消化管の始まり
3. 顎---咀嚼に関わり上顎と下顎が動く
4. 軟口蓋---挙上し鼻腔とを遮断
5. 舌---食塊形成

問 2. 嚥下障害で起こりうる症状について、誤っているものを選びなさい。

1. 喉頭下垂により喉頭残留しやすい
2. 口腔内の感覚低下によって一口量が減少する
3. 軟口蓋挙上不全により鼻腔への逆流がある
4. 歯牙欠損により口腔残留が増える
5. 喉頭挙上遅延により唾液を誤嚥する

問 3. 嚥下機能について誤っているものを選びなさい。

1. 正常な口腔期では鼻咽腔が閉鎖される
2. 咽頭期障害ではむせの有無を観察する
3. 正常な咽頭期では舌骨が挙上する
4. 口腔期障害では舌機能が問題となる
5. 正常な咽頭期は喉頭蓋が上方へ回転して始まる

問 4. 食の支援に関わる食種とその役割の組み合わせで適切なものを選びなさい。

1. 歯科衛生士----義歯の作成
2. 管理栄養士----経腸栄養の処方
3. 言語聴覚士----嚥下機能の評価
4. 薬剤師----摂食行動の評価
5. ソーシャルワーカー----食事環境の調整

問 5. 嚥下障害患者の治療のポイントとして以下にあげるものの中で誤っているものはどれか
選びなさい。

1. 経口摂取の可否を判断するうえで、嚥下機能のみならず精神・身体機能の評価も重要である。
2. 脳卒中などによる急性発症例では、早期から口腔ケアや食物を用いる訓練を開始する。
3. 経口摂取の開始時は、一般的に誤嚥しにくいゼリーやペースト食を選択する。
4. 経口摂取の開始後は、患者の摂食する様子を観察し、肺炎徴候の有無を確認する。
5. 誤嚥していてもむせない場合があることに留意し、嚥下後に咳払いをさせたり湿性嗝声を確認する。

問題 C

問 6. 嚥下障害患者の病態として正しいものを選びなさい。

1. 嚥下とは食物を口腔から大腸まで移送する一連の動作であり、随意運動による口腔期、反射運動による咽頭期、蠕動運動による食道期の3期に分類されている。
2. 咽頭期は小脳の嚥下中枢でプログラムされた強固なパターン運動により遂行されている。
3. 嚥下の過程に機能的または器質的障害が存在し、食物の適切な移送が妨げられている状態が嚥下障害であり、脳血管障害、神経筋疾患、頭頸部癌などさまざまな疾患のほか、加齢変化や全身衰弱などによっても生じる。
4. 食物が気道に流入することは誤飲とよばれ、肺炎や窒息の原因となる。

問 7. 嚥下障害患者の診断に関する説明のうち誤っているものを選びなさい。

1. 問診ではむせや飲み込みにくさなどの自覚症状のみならず、肺炎徴候、既往歴、内服薬なども聴取する。外来患者では症状を自覚している場合も多い。
2. 精神・身体機能の評価を行うとともに、口腔や咽頭、喉頭を診察する。喉頭の診察が困難な場合は発声させて、声門閉鎖不全による氣息性嘔声や唾液誤嚥を示唆する湿性嘔声の有無を確認する。
3. 簡易検査(スクリーニング検査)として、反復唾液嚥下テスト、水飲みテスト、食物テストなどが利用されている。
4. 精査が必要ならば、X線透視下で嚥下関連器官の運動と造影剤の動態を評価する嚥下造影検査や、軟性喉頭内視鏡を咽頭腔に留置した状態で食物を嚥下させ誤嚥や咽頭残留の評価を行う嚥下内視鏡検査を施行または依頼する。

問 8. 咽頭期は食塊が後方の咽頭口部に送りだされるときに始まる。適切なパターンと強さをもった感覚刺激が孤束核に届くと、疑核において、パターン化された連続した運動事象発現の引き金が引かれる。この連続して起こる事象には気道防御と食塊推進の双方が含まれており、それらは随意的コントロールの及ばない領域である。これらの事象には次のようなものがあるが間違いが一つある。それはどれか？

1. 口蓋帆咽頭閉鎖(口蓋帆の短時間の前方移動と、それに続く非常に速い挙上と咽頭の側壁・後壁への堅固な接触)
2. 舌骨喉頭複合体の挙上と前方移動
3. 真声帯、仮声帯の閉鎖と呼吸の中断
4. 喉頭口を覆う喉頭蓋の反転
5. 口蓋咽頭筋の上前方移動
6. 上食道括約筋の開大

問題 C

問 9. 間違っているものを選びなさい。

1. 経腸栄養者と経口摂取者を比較した場合、すべての口腔内日和見菌において、経腸栄養者が経口摂取者より検出率が高かった。
2. 誤嚥すると必ず肺炎を発症する。
3. 34歳±3.7歳の健常者でも、50%が睡眠中に唾液誤嚥している。
4. 高齢者の8割が不顕性誤嚥している。
5. 70歳以上の元気高齢者の28%が不顕性誤嚥している。

問 10. 間違っているものを選びなさい。

1. 回復期リハビリテーション病棟では、活動量の増加に伴い栄養投与量を増やす必要がある。
2. 入院患者の嚥下障害は、療養病床>回復期リハビリテーション病院>一般病棟の順に多い。
3. 回復期リハビリテーション病棟入院患者の約30%に嚥下機能低下が認められる。
4. 療養病床入院患者の約10%に嚥下機能低下が認められる。

問 11. 筋と運動神経支配との組み合わせで誤っているものを選びなさい。

1. 胸鎖乳突筋----副神経
2. 側頭筋----三叉神経
3. 頬筋----顔面神経
4. 舌筋----舌咽神経
5. 輪状咽頭筋----迷走神経

問 12 脳血管障害急性期の栄養管理として誤っているものを選びなさい。

1. 消化管には異常がないことが多いので、原則として経口摂取、経腸栄養を実施する。
2. 意識障害がなく病状が安定している場合は、嚥下機能評価の結果に応じて可能な限り早期に経口摂取、経腸栄養を開始する。
3. 広範な脳梗塞や重度の脳出血があり、脳浮腫進行に伴う嘔吐の危険が高い場合は、病態が安定してから発症後1週間を目安に経腸栄養を開始する。
4. 早期に経腸栄養が開始できなかつたり、十分なエネルギー投与ができるようになるのに時間がかかたりする場合には静脈栄養を併用する。
5. 誤嚥性肺炎や下痢の発症率の低下させるため積極的に半固形状流動食の使用が推奨されている。